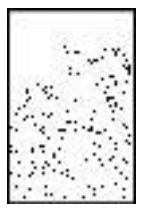
あしやの民話②
観音さんに助けてもらった牛



●文・三好美佐子さん
●絵・竹本温子さん

むかしのあしやは、ほとんどの家が、農家やった。そのころの話。

あしやからちょっとはなれた村に、牛のえき病がはやっていると、うわさが流れてきた。

そのえき病というのは、牛だけがかかり、あっという間に、牛が死んでしまう病気やった。

そのことを聞いたあしやの人たちは、はじめは、

「こわいこっちゃなあ。」

と、よそごとのようにいうとった。

ところが、「村の中のどこどこの牛が、えき病で死んだ」という話になると、人びとの目の色がかわり、あわてだした。

いそいで、ばくろう(牛買い人)をよんで、ただみたいなねだんで、牛を売ったりする家もでだした。

元太の家も、だいじにこうているクロのことで、さっそく心配しはじめた。

クロは、元太が生まれる前からいた牛で、まっ黒のりっぱなおすの牛や。毎日、元太がクロの体を洗ってやったり、えさの世話をしたり、牛小屋のそうじなどもしとって、元太とクロは兄弟みたいにしてきた。

元太は、クロがえき病にかからんように気をつけた。そのへんの草や木を食べさせたりのませたりするようなことはさせんかった。

田畑にも連れていかず、牛小屋に一日中とじこめておく日が多くなっていた。

クロは、だんだんやせてきて、元気がなくなった。(外へ連れていったら喜ぶのに)と、元太は思った。

クロはそれまで、田や畑で、お日さんをあびてはたらくのが好きな牛やった。

そのころ、あしやの田んぼは、山が海に近いこともあって、急なしゃめんの土地で、たな田が多かった。

クロは、そんなたな田の坂道をのぼりおりするのがすきで、重い体をかるがると動かしとった。

それが、今は一歩あるくのもしんどそうにしとる。ひょっとすると、えき病にかかっているかもと、元太は心配でならんかった。

そんなときや、近くの人がとんできて、

「三条村の観音さんに、牛を連れておまいりしたら、えき病にかからんそうや。」

と、いうてくれた。

それを聞いて、喜んだ元太はいうた。

「おっとう、今からいこう。はよういこう。クロを連れていって、観音さんに、おねがいしよう。」

ふたりが牛小屋に行くと、クロは、大きい目をつむっとった。そして、(てここでも動かんぞ)と、すわっとる。

「クロ、お前のために行くんやで。観音さんに、おねがいにいくんや。いこう。」

元太が、しぼるような声でいうと、クロはよろよろしながらも、立ち上がった。おっとうが、つなをひっぱり、元太がしりをおした。

家をでるとき、日がおちはじめていた。おっかあは、だまって、目になみだをためて、見送っていた。

「よいしょ、よいしょ。」

元太が声をだすと、クロはいやいや歩きだした。

山道にさしかかると、おっとうが、

「クロのとくいの山道やでぇ。」

と、引っぱるつなをゆるめた。だが、クロは坂道をいやがった。しんどいのや。

「がんばれ、クロ。がんばってくれ、クロ。」

おっとうも元太も、声を合わせて、クロをはげました。

おし上げても、クロは足に力がなく、ズルズルと土といっしょに、くだりはじめよる。

「クロ、お前、何しよるんや。前や、前にいけ、ほら。」おっとうも、元太も、ひっしやった。

おっとうのつなを持つ手も血がにじんでいる。

けど、クロも命がけや。一歩一歩、足を前にだしはじめた。

牛と人が一つになって、山をのぼりだした。

観音さんのお寺の屋根が見えた時、元太は心の中で手を合わせた。

あけ方、苦労を重ねて、やっと境内に、クロたちはついた。長い道やった。

「はぁ、はぁ」と、人も牛も大きい息をついた。境内には、何頭かの牛が木につながれているらしく、くろぐろとした牛の姿が、かげ絵のようにうかんで見えた。

クロは、それらの牛を見て、急に、しっかりと歩きはじめた。クロにこんな力が残っていたのだろうかと、元太はよろこんだ。

夜あけの白いもやの中で、牛たちは少しずつ動いたり、よわよわしく「モー」と、鳴いたりしはじめた。

クロと同じ木につながれているとなりの牛が、体をすり寄せてき、ぬれたはなをふれ合わせてきた。ここまでが上がってきた苦労を、なぐさめてくれてるみたいや。

元太も、クロにいうた。

「クロ、ようがんばったなあ。」

と、あらためて、クロをほめてやった。

あたりは、うっすら、あかるくなった。元太は、境内につながれている牛をみておどろいた。こんなにたくさんの牛がいるとは思わなかったからだ。

どの牛もつかれたようすであったが、確実に生きていた。生きている強さを体であらわしていた。

それはたぶん、ここにくると病気にはならないという確信が、牛といっしょに登ってきた村人にあったからだろうか。

このえき病のそうどうは、まもなくおさまった。

ふしぎなことに、観音さんの境内につながれた牛は、一頭残らず、えき病にかからずにすんだという。

「観音さんのおかげや。」と、あしや村の人はよろこんだ。

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理し、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。

今回は、三条町の小阪保さんからお聞きしたお話の一つを紹介しました。

公民館・夏休み子ども教室

問い合わせ　公民館　☎35-0700/FAX31-4998(〒659-0068 業平町8-24)

水　彩　画　教　室　《２回連続》

■日時　７月27日・８月３日(木)午前９時30分～11時30分　■会場　市民センター 201室　■内容　水彩絵の具で植物画にチャレンジ　■講師　画家・佐々木節子氏　■対象　小学生(保護者同伴可)20人　■材料費等　600円

陶　芸　教　室　《２回連続》

■日時　７月28日・８月11日(金)午前９時30分～11時30分　■会場　市民センター美術室　■内容　動物や植物のペーパーウエイト等を作ります　■講師　芦陶会　■対象　小学生(保護者同伴可)20人　■材料費等　600円

切　手　教　室　《２回連続》

■日時　８月19日・26日(土)午前10時～11時40分　■会場　市民センター 203室　■内容　切手の収集の楽しい話と、いろいろな切手を使って作品作り(切手などのお土産つき)　■講師　芦屋郵趣会　■対象　小学生(保護者同伴可)20人　■費用　100円

ラーメンで環境学習

■日時　８月21日(月)①午前10時～正午　②午後１時30分～３時30分　■会場　市民センター料理室　■内容　環境の学習をしながらラーメンを作って試食　■対象　小学生(保護者同伴可)20人　■費用　100円

科学教室－２足歩行ロボットを作ろう

■日時　８月28日(月)午前10時～11時30分　■会場　市民センター 203室　■内容　２足歩行ロボットを作ります　■対象　小学生(１～２年生は必ず保護者同伴で、３年生以上は保護者同伴可)20人　■材料費等　600円

ひんやりスイーツとちっちゃな焼菓子

■日時　８月24日(木)①午前10時～正午　②午後１時30分～３時30分　■会場　市民センター料理室　■内容　クッキーなど　■対象　小学生(保護者同伴可)20人　■材料費等　600円

手作り工作教室

■日時　８月28日(月)午後１時30分～３時　■会場　市民センター 203室　■内容　型紙を使った簡単な工作にチャレンジ　■対象　小学生(１～２年生は必ず保護者同伴で、３年生以上は保護者同伴可)20人　■費用　100円

【申し込み】　７月21日(金)までに、はがきかファクスで、教室名(①または②)・住所・氏名・学年・電話番号を記入し、公民館へ。※応募多数の場合は抽選、結果ははがきで連絡します。

谷崎潤一郎記念館・文学館講座

問い合わせ　谷崎潤一郎記念館　☎23-5852/FAX38-3244(伊勢町12-15)
Eメール　ashiya-tanizakikan@rhythm.ocn.ne.jp

肥前有田焼《白磁大皿に上絵付け》講座

■日程　９月９日・30日・10月14日・21日・11月４日(土)午前10時～正午　■会場　谷崎潤一郎記念館・講義室　■内容　有田焼白磁の大皿に三大様式の絵柄をスケッチし、窯で焼き上げます　■講師　「肥前陶芸館」主宰・福田一義氏　■受講料　10,000円(５回分・材料費別途、器により異なります)※申し込み時に支払い　■定員　20人　■申し込み　電話またはメールで上記へ

薬師寺・心のふるさと

■日時　９月19日・10月24日・11月14日(火)午後２時～４時　■会場　谷崎潤一郎記念館・講義室　■講師　「法相宗大本山薬師寺」執事・生駒基達氏　■受講料　各2,000円※会場で支払い　■定員　20人　■申し込み　電話またはメールで上記へ

■チャリティ作家作品バザール　＜７月28日(金)・29日(土)・30日(日)＞
絵画・陶芸・アクセサリー等を販売。売上金は、ジャワ島震災見舞金として寄附します。

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成２年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館１階)、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

「芦屋のうつりかわり」
21.6×30.5㎝／135頁／
紙表紙・銀箔押し(ハードカバー)
頒布額　500円

◀大正時代中ごろの海水浴風景

問い合わせ　広報課　☎38-2006